

# 守護神 ゴーレス

第13話  
レイラインへの旅  
ACES HIGH

作：みかつきなお

絵：せんざいナオミ

守護神ゴーレス第13話  
レイラインへの旅

Access high

「ワシの設計したジェットエンジンに文句があるか！　対流圏内、つまり雲があれば航続距離は無限大。行け裕一！」  
小夜子を取り戻せ！」

幸賢老人は杖を振り上げた。

## 出発準備

津堅島の陸上自衛隊基地内にある新しいゴーレス格納庫に一同は集まって調整を始めていた。上空には桐丸重工の搬出用飛行船最新型BZ-111が待機していた。

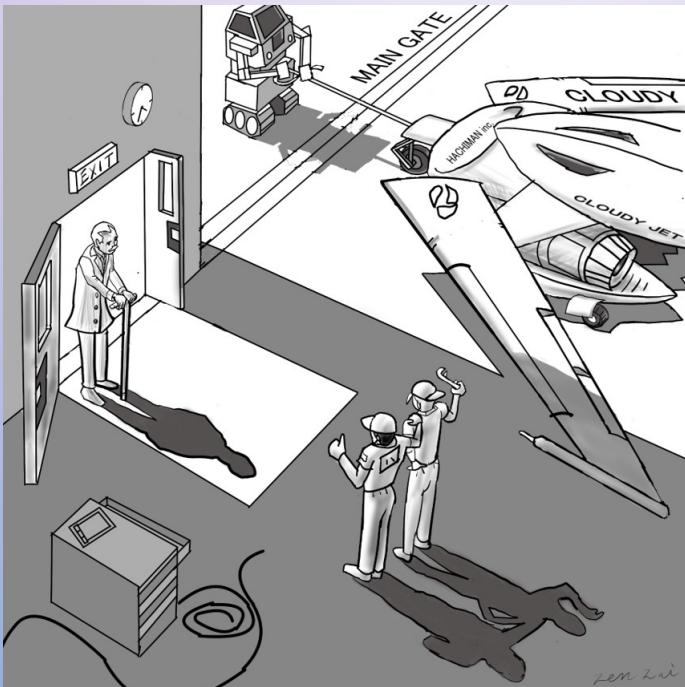
比嘉辰巳を中心に陸自整備員から選ばれたチームがゴーレスの整備とオプションの製作をしていた。

陸自の整備クルーに指示をする辰巳が裕一に解説した。  
「説明しよう。来るべき空中戦に向けて、空自からパーツを取り寄せて作った『ゴーレス蒸気還元ジェットエンジン』だ！」

「僕に秘密でこんなすごいものを、手伝わしてくれれば良かったのに」

「君は本体を守ってくれ。監督からの指示だ」

その時格納庫の入り口で逆光に照らされて長い影から喝を上げる声が聞こえた



「オジー、俺はやるよ！」

裕一は涙目だった。

「舜とみずきはいるか？」

「舜、お前に翼を与える。飛べ！ みずきよ、皆の力をま

とめよ、葦原茂敏の力がお前にはある」

にこやかになつた幸賢は格納庫の片隅にある和室でお茶を注ぎ仏壇にそなえて手を合わせた。ここにいる一同は小夜子の無事を祈つた。

辰巳は裕一の肩を叩いた。

「考えこんでも仕方がない。今回は兼光の情報網が大事だ。できることをやろう」

「そうです。今は出発の準備ですね」

「俺と小雪は行けないが桐丸重工とニューロ研からアクチユーターとH.C.P.U専門のサポートスタッフがつく。俺達は最強のチームだ」

客スペース下部のゴーレスは浮上して行く。  
船内の裕一とみずきと舜は小夜子の行方を捜す目的と共に何か大きな目標を感じた。

日本地図をにらむみずき。ウムイシステムのモニターを見つめる裕一。

足元に雲海が広がり青い空の上を飛行している。それが気持ちを落ち着かせる高揚感をうんでいるのを舜は感じていた。

「ゴーレスの背中に乗って飛んでいるみたいだ」

「おい、舜。最初の目的地名古屋につく前にテストがあるんだ。空中発進の……」

「ええと空中でゴーレスを出すということは……あ！」

非常用ハッチを指差した。

「そう、あのゴンドラで降りてゴーレスの腹部に回りこんで乗り込む」

「えええ！」

舜は高所恐怖症であることを思い出した。

「いま神経を集中してからしばらくだまつて」

みずきはA1サイズの大きな日本地図を広げて、ゴーレス起動の鍵『龍の眼』を持って地図上をなぞっていた。

中央構造線

飛行船BZ-111に腹部と胸部の拘束バンドで固定され、乗

「舜、地図の右上に立つて。東北あたり。裕一は左下、沖縄付近」

二人は指定の位置に立ち、龍の眼を本州付近に当てるところやつとした赤い線が三人には見えた。

「これは……」

「裕一は伊座の浜、舜は霞ヶ浦に指を指して」

するとより色が濃く見える。

「ええともしかしてこれはもしかすると、地理でならつた

……中央分離線？」

「裕一さん中央構造線」

みずきは龍の眼の位置を中央構造線に沿つて動かした。

「高千穂、高野山、伊勢神宮、諏訪大社、鹿島神宮、日本の聖地は中央構造線に沿つて存在する。そして構造線だけではなく日の出日没の線で結ばれている」

本の端をメジャーかわりにみずきは線を地図上に引いていた。

「ずっと考えていた。この力が授かってからいろいろ調べて考えていた。私の魂の奥にいるあの神官はだれなのか」

「僕がゴーレスがミカヅチという話だったよね」

「うん、やはり舜に縁があるのは鹿島神宮の祭神タケミカヅチ」

「おい、みずき。この中央構造線が何を意味しているか、俺達になにか意味があるのか」

「うーん、理屈じやない。線は線。それが繋がっている、そう考えて」

この赤く見えるラインを3人は見つめつづけた。

aces high

夕暮れの和歌山県熊野上空にさしかかった兼光達の編隊はレーダー上の機影を確認した。パイロットは振り返ると兼光に言った。

「1万m上空から降下してきます。望遠画像を投影。アクチュエーター機です！」

「なに？ こっちに画像まわせ」

映しだされた機影に兼光は苦い顔をした。

「橋の新型偵察機『飛燕』、俺等をけん制に来たな。船越君、鼻つ柱くじいてやりましよう」

併走する二号機に乗っている船越は半目で居眠りをしながら映画をみていたがヘッドフォンから急に指令が現れて

びっくりした。

「兼光さんスクランブル?」

「売られた喧嘩は買いましょう船越君」

兼光達は非常用ハッチからゴンドラでコクピットに素早く乗り込んだ。

「イヒカよ、本当の戦争が始まりそうだ」

心に響く声が聞こえる。

「このへタクソ。前回は機体に傷をつけやがつて。ちやんと操縦するんだよ」

「わかつてる。行くぜ」

Hatsukuni Mobile Actor Ver8 Whika

「兼光さんあいつはまさか橋製作所ですか」「そうです。今経済的にも橋と桐丸重工は交戦状態です。ついに実力行使です」

イヒカとブラウンは上昇して飛燕に接近した。

「本気の攻撃」

「こちらは正当防衛になります。自衛官さん行きましょ

う」

「よし、あいつを捕縛します」

ブラウンは投てき型ワイヤーガンを打ち込んだ。飛燕はそれを交わし2機の下に回りこんだ。

「偵察および戦闘機タイプ。新型は早すぎる」

「真面目な自衛官君！ 今度は榴弾砲を構えた！」

飛燕は肩に取り付けた榴弾砲を構えて下から上昇していく。

「こちらは普通の鉄屑のマシンじゃない。見せてやる！」

イヒカは羽を畳んで頭からフリーフォールになつた。

「兼光さん。ノーガードです。真正面にロックオンされてます！」

ブラウンは牽引型ワイヤーガンを飛燕の尻尾に打ち込んだ。傾きが変わり、飛燕の榴弾砲がイヒカの脇横を抜けて

いた。

「ブラウンの船越君、敵影は確認できるか？」

「はい！ 仰角40度、1時の方向、距離500、接近中！」

飛燕は減速して飛行船の上で実弾を発射し始めた。

イヒカは飛燕に接近したそのタイミングでステイクドライバーを発射して飛燕の両肩を貫いた。そのまま両翼も破損した。

両腕両翼を失った飛燕は方向制御が取れなくなり、落下していった。バラシュートは開いたがあまり減速することなく熊野の森に落下した。

急降下するイヒカは地表に落ちる前に翼を広げ、再度上昇して帰還した。

「さすが兼光さん……。だがあのバイロットは……」

「船越君は百名ビーチの事件以外実戦に出たことがないんだろ。俺は経済的社会的に何百人殺したかわからない。今のは敵対企業の社員を排除しただけだ。旅行とだまして悪かった。我々の任務は誘拐された女の子達の救出。そして橋グループとの本物の戦争が始まることです」

船越はいつも鵜飼三佐からハザラスタンの様子を聞いていた。これが戦争だと、そして兼光の微妙な声の震えが鵜飼が戦争を思い出す時の声に似ていた。

日向灘を航行中の舜たちの飛行船にも情報が伝えられた。

「本気で戦うつもりなのか…」

「敵が戦闘意欲を掻き立たせこちらのウォードを盗むのならば平常心でいるしかない」

「舜が一番平常かもしれない」

「え？ うちには飛んでこないよ敵さん」

「根拠は……？」

「僕達ゴーレスチームに来て欲しいから小夜子を誘拐したんでしょ。そして手勢のいるところでゴーレスを鹵獲。ろかく今までのパターンだと奴らのやり方は見えてきた」

裕一は強く頷いて舜の肩をくんだ。

「なんかとうるばつて（ぼーっとして）いるように見えても、やー（お前）が一番むかんげー（物考え方）しているんだ。小夜子に会うまでは死ねない。そうだな」

明日のヴァージョンアップ作業を目前にして津堅島の二ユーロコンピューティング研究所は重工からの情報に揺れていた。

「橋と重工が対立するとの計画にも影響がでます。サー

バ占有域の分配とか」

「桜君、そんな小さな問題ではない。利用権問題も一時棚上げかもしれないが桐橋賢人会議の意見がなければ我々は作業を予定通り行うしかない」

デスクで小佐田は考えこみながら答えた。

突然オノゴロ通常ネットワーク使用領域に回線接続要求のメールが入った。

「こ、これは桐橋賢人会議情報局、会長談話です！」

白衣の研究員達は一同モニターに向かって気をつけをした。

画面には背後の桐丸商事社章の前で白髪の薄いサングラスをかけた羽織袴姿の老人が椅子に座っていた。

桐丸グループ総裁、桐丸商事会長兼社長桐丸藤兵衛だ。

「明日のヴァージョンアップ作業。通常通り行うように。何が起こっても行うように。いかなる混乱があつても公共の利益のためにがんばって欲しい」

その言葉だけを述べた後画面は消えた。

「これだけですか……」

「混乱を予測されているのだ。統括委員会の内紛もすべて計算ということかもしれません。情報局は我々の質問に対しても桐丸商事専務林尊文からの返答を送ってきた。『まずはオノゴロの威力をもつて征せよ。道は開かれる。敵味方を超えた戦いが始まるのだ』」

#### 神宮特別神事旅団

夜になり寒くなつたのでログハウスに軟禁されている小

夜子と龍希はベッドを並べて寝ることにした。少し前に車から降りて来た黒いコートの男より手渡されたピザを二人で食べようとしたが、小夜子はおなかがすいているので冷蔵庫のキヤベツをちぎった。

「これも食べようよ」

「ちぎるなんて思つてもみなかつた」「生き残るのよ。なんでも食べないと」

結局あの男に食いついてみても何も話さない。

わかるのは総理の孫、神女の家系、ゴーレスのメンバー、メンバの家族。私達が狙われる条件。

電気を消そうとしているテレビ画面がライブフォン画像に切り替わり、黒い軍服風の服装をした男の顔が現れた。

「雪国の夜はいかがですか沖縄のお嬢様方」

「あなたが黒幕ね。バッファローの記録映像に残っていたあなた渚岐水都！」

「自己紹介の手間が要らなくなつたようだ。新しい私の肩

書きを教えよう。神宮特別神事旅団長渚岐大佐だ」

「黒い憲兵……」

『頸龍の設計図をあの黒い制服の憲兵にみせてはいけない』葦原茂敏の遺言を思い出した。

渚岐の軍服はナチスのSSを思わせた。そして腕章には赤

地に黒い鳥居を囲むように白丸、鳥居の間に赤い輪が描かれてゐる。

「明日は僕の神事を見てもらいたい。それを見てもらいた

くてここに来てもらつたようなものなのだ。」

「たつたそれだけ？ 何が狙いなの？」

「神事、儀式、それらは祭だ。祭は楽しくなくては」

さすがに小夜子も反論する気力がなくなつた。

「よく知らないけど私達を解放して欲しい。それだけ」

「祭が終わつた時にはね。明日5時にお迎えに参ります。

身支度を整えて待つて欲しいな。空の旅に連れて行つてあげよう

画面から消えた渚岐の映つた画面に向かつて小夜子は枕

を投げた。

「朝早いし、もう、あんまり考えたくない。龍希ちゃん寝よう」

ベットに入ろうとすると龍希が小夜子の毛布をひっぱつた。

「小夜子さん。一緒に寝ていい？」

小夜子は顔が赤くなつた。

「もう、わかつたよ。ベットから落ちないようにね」

龍希は小夜子によりかかった。

「あんまりべたべたしないで」

「小夜子さんの心が伝わつてくる。お爺さんにお父さんお

母さん、お兄さん。楽しそうなお友達。とても素敵です」

「わかるんだね。私の気持ちで楽しくなるならそれでいいよ」

「はい」

妹つてこんなものなのだろうか。自分が妹だから兄に甘え

ていることが普通すぎたんだ。私は頼られてるんだ。彼女の

ために私がしつかりしなければ。

づく